

筆者よりの付加的なメッセージ 二〇一七年十二月二十日

憲法国民投票は、二〇一八年夏から二〇一九年夏までの間のどこかで行われることになりそうです。

一番早く行われる可能性があるのが二〇一八年夏であることを考えれば、もうあまり時間はないと考えるべきでしょう。

緊急事態条項。九条自衛隊明記（または二項削除による自衛隊の軍隊化。現時点ではよりサギ的・ダマシ的な案である九条自衛隊明記が正案になるだろうという予測のもとにこの本を書いています）。それらは、この本で、簡潔なレポートに基づいてそのカラクリを説き明かすように、自由、平等、平和を破壊するものです。

備えあれば憂いなし。

後の祭りとならないように、

この本を通じて、安倍総理たちが真正面から語ろうとしない改憲の実態、憲法改正詐欺について知った上で、どう投票すべきか考えていただければ幸いです。

お願い

- ① この稿を基に、必要十分と思われる情報を提供しつつ、できるかぎりコンパクトに、読みやすく、わかりやすくして行きたいと思います。そのための意見やアドバイスなどがありましたら、どうぞお寄せ下さい。
- ②そして百万人単位の読者を持つ漫画家さんにコミック化してもらいたいと思います。みんなの名前で漫画家さんに手紙を書いて、頼みましょう。名前を連ねてくれる方は、氏名及び職業、所属またはお住まいの市町村など（「主婦」「市民」などもOKです）をお知らせ下さい。
- ① ②は下記メールアドレスへ。

tubo@kokumintohyo.net

目次

イントロダクション	3
PART 4 守護神のおとうさんたち	6
# 4.1 憲法のおとうさん	6
# 4.2 幣原さんってどんな人?	7
# 4.3 幣原さんってどんな人?	9
# 4.4 幣原さんってどんな人?	11
# 4.5 平野三郎さんが記録した、幣原さんの言葉	13
# 4.6 なぜ幣原さんは?	17
# 4.7 マッカーサー元帥の手紙・自叙伝。羽室メモ	23
# 4.8 ほかのおとうさんたちも日本人だった	31
# 4.9 歴史の流れの中で	32

イントロダクション

憲法を変えるかどうかを決める国民投票が、二〇一八年夏から二〇一九年夏までの間のどこかでまず確実に行われるだろう。早ければ二〇一八年夏にも……。

三千万署名やデモや国会への論戦など、国民投票を実現させないために最大限の努力が必要な一方で、実現させてしまった場合を想定して早めに備える転ばぬ先の杖も必要だ。そう考えて、この本を書いた。

モリカケ疑惑と同様に、憲法改正においても安倍総理たちが憲法改正詐欺だということ、この本を通じて知ることができるだろう。

国民投票になった時にはどう投票するか、そろそろ考えておいた方がいいのでは？

この本は世代を超えたみなさんに、小説形式で、「投票所で迷わない、憲法国民投

票のツボ」を伝えるものです。これからの世代の人たちにもよりわかりやすく親しみやすく伝えるために、この本を原作としたコミック化も考えています。（筆者註・現段階では、この原稿はまだ、たたき台と考えてください。公募する、コミックの原作の一つとしてのそれでもあります。要はあくまでP36から始まる「PART3 投票所で迷わない、憲法国民投票のツボ」だと考えています。その部分だけプリントアウトしたものも、この原稿に添えてお渡しします。コミック化のためには、PART3を中心にコンパクトに再構成した方がいいかもしれません。また、PART1〜PART3、PART4〜PART5をそれぞれ一つの大きなセクションとして再構成してもいいかもしれません）

PART3に詳しく書きましたが、

四つの案を四枚のクッキーにたとえて説明すると・・・

それら四枚のクッキーの中には毒入りのクッキーが混ざっています。緊急事態条項と九条自衛隊明記の二枚です。

あなたが一般国民なら、この二枚は絶対に食べてはいけません、その四枚を四枚全部食べるか、四枚全部食べないか、二択のどちらかを選ばなければ（＝投票しなければ）ならない場合には、四枚のクッキーを全部食べる選択をするのはやめるべきだし、そのことを一人でも多くの人に伝えるべきでしょう。

安倍総理たちの緊急事態条項と九条自衛隊明記についての説明は詐欺です。詐欺のセールストークです。

彼らが企てているのは、国民投票を利用した憲法改正詐欺です。PART3では、名探偵コナンが事件のカラクリを解き明かすように、あの超有名な**簡潔なしポート（四角い枠で囲んだ部分）**に基づいて、安倍総理たち説明するの改憲のセールスポイントのカラクリを解き明かしてゆきます。

ストップ、憲法改正詐欺！

登場人物

ケンタとノリカ 若いカップル

Q 摩訶不思議美少年（実はケンタとノリカの未来の子供）

坂本龍馬

幕末に自由と平等と平和のために奔走したヒーロー。あの世から、安倍総理たちの改憲案によって自由と平等と平和が脅かされている現在に舞い戻って、ケンタとノリカに憲法のツボを伝授する。

PART1とPART3の概要

謎の美少年Qに表参道で声をかけられたケンタとノリカはQによってシミュレーション空間にいざなわれ、そこで憲法の基本を体得し、Qに連れられて現実空間のカフェに行く。そこで二人を待っていたのは坂本龍馬。

「高知にあるわしの記念館の館長さんがわしについて、

『(彼の) 根っこにあるのは、自由と平等と平和。それらは人間の一番大事な根っこです。その根っ子が揺らぐ平成の現代と幕末は似通っている。龍馬の出現を持ち望まれているのが今の時代ではないかと思えます』

と言っちゅう(「ちゅう」は土佐弁で「ている」。言っている)。

<http://yoma-kinenkan.jp/wp/wp-content/uploads/2017/02/hitou72.pdf>

その通りだと思う。

だから、わしはあの世から今ここに舞い戻ったんじゃ」と龍馬。

ケンタとノリカは龍馬やQから更に憲法の基本を聞いたあと、「投票所で迷わない、憲法国民投票のツボ」を学び、更に安倍総理たちが国民投票にかけようとしている改憲案のカラクリについて学ぶ。

(「PART1 見えない守護神」、「PART2 主役が見えたと憲法がわかる」、「PART3 投票所で迷わない、憲法国民投票のツボ」省略)

PART 4 守護神のおとうさんたち

#4-1 憲法のおとうさん

「コミックの本を作る時、作品を書く作家と、それを読んだうえで、もっとよい作品にするために必要なら作家にアドバイスしたりする編集者とがいることは知っちゃうね？」と龍馬。

「ええ」ノリカは頷いた。

「作家の書いた原稿を、編集者はよく読んで、必要があれば、削ったり書き加えたり、なおしたりして、ベストの作品に仕上げる。で、まず、日本国憲法の作者が誰か、そのことを話しちゃろうか（＝話してあげようか）」

「話して」



「このおじさんが誰か知っちゃう？」

「さあ」ノリカは首をかしげ、ケンタも「わかんないな」と答えた。

「この人は幣原喜重郎という人なんじゃ」

「シデハラキジユウロウ？」

「そう。幣原さん。戦争に負けたあとの、二番目の総理大臣で、この人ちゅう作家が日本国憲法に『日本は軍隊も兵器も持たない』というルールと『象徴天皇制』のルールをセットで入れることを編集者に提案した。

編集者はどうしたものかと悩んだけど、幣原さんに説得されて結局そのルールを日本国憲法に入れることに賛成して、そのように編集作業を進めたんじゃ」

「そうだったんだ？」

「うん。編集者というのは、戦後日本を占領していた連合軍の最高司令官のマッカーサー元帥という人と彼のスタッフ。それから当時の日本の国会も日本国憲法を徹底的に審議して可決したという意味では編集者じゃった」

「へえ」

「で、幣原さんは自分が『日本は軍隊も兵器も持たない』というルールと『象徴天皇制』のルールをセットで入れることをマッカーサー元帥に提案したことをほとんど誰

にも言わないまま亡くなった。だから、七十年以上の間、日本も含めた世界の多くの人が、日本国憲法の『日本は軍隊も兵器も持たない』というルールと『象徴天皇制』のルールの作者はマッカーサー元帥だと誤解してきたんじゃないかね」

「実に興味深い」

とケンタは思わず言った。

「どうして幣原さんはそのことをほとんど誰にも言わないまま亡くなったの？ 幣原さんってどんな人だったの？」

「あたしも知りたい」ノリカも身を乗り出した。

「オーケー。じゃ、まず、幣原さんってどんな人だったか話しちゃろうか？」

#4-2 幣原さんってどんな人？ 1

「幣原さんは、こういう人と友達だったらいいなって思えるタイプの人間じゃったと思っちゃう（＝思っている）」

「へえ」

「幣原さんの特色を三つ言うぜよ。」

- 1 番目 ほかの人は思いつかない、みんなが吞めるような提案ができる人
- 2 番目 自分を曲げなかった人
- 3 番目 人生の使命を全うするために、運命によって生かされた人

「おー、なんかドラマチック」とケンタ。

「だね。まず、1番目から話すぜよ。」

一九二一年に世界の軍隊と兵器を減らし、戦争の原因になりそうな問題も解決するための、人類初めての『武器を減らそう』国際会議がアメリカのワシントンで行われたんじゃないかね。その世界の大ステージで、スーパースターになったのが幣原さんじゃった。ほかの人には思いつかなかった、みんなが吞める提案をして会議をまとめた。それも命をかけてのー」

「命をかけて？」ノリカは尋ねた。

「そう。」

実は、この会議の始まる前から幣原さんは健康を害し、腎臓結石というきつい病気に苦しんでいて、そういう状態でワシントン会議に参加したんじゃないかね。

そして、この会議で決まった三つの主なことはみんな幣原さんの提案なしには決まらなかった」

「それでスーパースターになっちゃったのね？」

「そう。一番のグッドジョブは日本と中国の、戦争の原因をなくすための話し合いの時じゃった。」

話し合いは暗礁に乗り上げて、日本側のその話し合いの責任者はほとんどヤケになって、病気で寝込んでいた幣原さんに、

『君に寝てしまわれてはもうどうにもならん。今晚は一つ、ニューヨークのクラブにでも行って、遊んでこようか』

みたいなことを言った。

それを聞いた幣原さんは病気の体にムチ打って、空中分解寸前の日本と中国との話し合いに出席したんじゃない

「大丈夫だったの？」とノリカ。

「まあ、なんとかね。」

その時の幣原さんは何週間も寝ていたので、もう足はフラフラ。

彼が寝ていた大使館の階段は相当長く、やっと降りて、抱かれるようにして自動車に乗った。

会議場のあるビルに着いたら、会議場に続く階段も、これまた相当長かった。やっと登り切った時には、周りが『大丈夫か？ 倒れるんじゃないか？』と心配して聞いてきたほどゼーゼー息切れしてしまっちゃった。

『いやあ、まあ、なんとか』とか答えながらやっと我慢して椅子に座っていると、中国の全権たちがやってきて、『あなたが出られるようになったのは嬉しい』などと声をかけてきた。

敵味方を超えて、幣原さんは信頼されていたんじゃないよね。

さて、会議が始まると、中国全権は日本を盗人のように言いだした。

それを聞いていた幣原さんは黙っていられなくなって、中国全権に対してこう言った。

『ちょっと待って下さい。日本は中国の鉄道その他を、奪い取るようなことをいわれるが、それ、違いますよ。お金を払って買いつけるといふ話だったでしょ？ 日本はちゃんとお金を払うのだから、盗人でも何でもないと思うんですけど。過去の記録をよく調べてごらん下さい』

それを聞いた中国の全権は『それならば、われわれも誤解していた』『それならば日本の態度は判る』などと言いだした。

勿論、事實は幣原さんが言った通りじゃった。

そんなわけで、スツタモンダはあったけど、とにかく話について条約が結ばれたんじゃない

「そうだったんだ？」とケンタ。

「ああ。この話にはまだ続きがある。

帰国後の幣原さんは、ワシントン会議を主催したアメリカの大統領ハーディングから一通の手紙をもらった。

その手紙にはこう書いてあった。

『正直に言えば、どうしてあの会議の後に、あなたが長生き出来るか、われわれは不安の念をもって見ていました。ところがあなたは、日本に帰られて、大分具合がいいということを知っていて、非常に嬉しい』

幣原さんはすぐに返事を書いたんじゃないけど、

それが届く前に、心配の手紙をくれたハーディングの方が脳溢血で急死してしまっ
たんじゃないね」

「マジ？」

「うん。全く人生は何があるかわからないぜよ。その『何があるかわからない』が戦後、幣原さんによって、日本にとって世界にとって、今度はポジティブな形で起こるとは、その時の彼自身に予期できるわけはなかったんじゃないよね」

#4 3 幣原さんってどんな人？ 2

「2番目の特徴。

自分を曲げなかった人。

戦時中、戦争にみんな協力する体制翼賛会というものが作られ、それが議会では翼賛政治会というものになった。

ところが、当時議員だった幣原さんは翼賛政治会に入らなかったんじゃないよ」

「よくわからないけど、それって大変なことだったんじゃないの？」とノリカは尋ねた。

「その通りじゃ。

すると家に憲兵が幣原さんの家に押しかけて来た。

憲兵というのは軍隊の中の警察官で、軍人以外の人でも捕まえて、拷問したりもして、みんなからとても恐れられちゃった。

その憲兵が幣原さんに向かって、

『あなたは翼賛会に入らないことを不賛成と返事されたそうですね。戦争をみんなが進めるムードに水を差す気ですか？ それでは面白くない事態が起って来るかもしれないから、そのお返事は撤回されてはいいかがでしょうか。これは隊長の命によってあなたに御注意申しあげます』

と脅した。

幣原さんは、

『ご注意は承りました。しかしあの返事は自分で書いて出したもので、その決心を変
える意思は毛頭ありません』

と答え、更にこう言ったんですね。

『ところであなたに一つ訊きたいが、よろしいかな』

『はあ、なんででしょう？』

『いやね、アメリカでは戦争をはじめるとには国会の承認を求めることになってい
るのですが、今度のアメリカの対日参戦については、一人を除いて他の全部が賛成の
投票をしましてね』

『へえ？』

「反対したのは誰かというと、婦人議員一名だけで、これが敢然反対投票をしたんで
す。

これは何を物語ると思いますか。

婦人というものはたいがいあまり抗争的ではないので、だからもし誰かがその婦人
に対して、あなたが私のところへ言って来たように、あなた一人で国民の一致を破る
ことはできませんから、やはり賛成投票をしてはどうですかと説きつけたならば、そ
の婦人はあるいは強いて反対論を言い張らなかつたかもしれません』

『かもしれませぬ・・・』

『しかるにその婦人が断然反対投票をしたということは、それは誰もその婦人の意思
をまげようと努めなかつたことを証明していると思います。

これが重要な点です』

『はあ・・・』

『これに対してドイツの国会というものは、ヒトラーの演説は新聞に詳しく報道され
るけれども、議場で政府案が可決されたか、などということは少しも報道されません。

これは当たり前のことで、議員は全員一致でヒトラーに賛成することに決まり切っ
ているので、それを報道する価値がないからです。

そこで質問です。どうぞ二択で答えて下さい。

あなたは、ドイツのように不自然の全会一致がいいか、

アメリカのように一人でも反対する者は反対させ、自然の全会一致または大多数の
一致によって決するという形をとる方がいいか、

どっちがいいと思いますか？

よく考えて御覧なさい。

私は反対する者には反対させ、賛成したい者が賛成すれば、これは自由意思で賛成したということがハッキリして、投票の本当の価値というものが発揮されると思います。

さあ、アメリカの例がいいか、ドイツの例がいいか、あなたはどう考えますか？」
憲兵はしばらく黙って考えていたが、突然椅子から立ち上がって敬礼をし、

『よくわかりました。私は隊長の命令で来たのですが、あなたのご意見がもつともですといつてこのまま帰れば、私は隊長から必ず怒られます。たとえ怒られても、私はあなたのお考えの方がいいと思いますから、私は二度とあなたのところへ説得に来ません。よく判りました。どうかあなたはご自分のお考えを貫いて下さい』

と、そう言って帰ったんじゃ。

その先が面白い、その後彼はしばしば幣原さんのところに本を持ってきてわからないところについて教えを乞うようになり、

ある日、『選抜されて憲兵学校に入校することになり将校への道が開けた』と報告しにきて、

『これからは純然たる学生になるのですから、一そう先生のご教授を御願いしたいのです。どうぞよろしくお願いします』

と挨拶したんじゃ」

#4 4 幣原さんってどんな人？ 3

「そして3番目の特徴。人生の使命を全うした人。そのために生かされた人。

戦前の軍国主義のうねりの高まり行く中、

幣原さんの政治の仲間の総理大臣や大蔵大臣はテロによって命を奪われた。そして幣原さんも暗殺リストに入っていたんじゃ」

「マジ？」

「ああ。

血盟団というテログループがあつて、一人一殺とか言つて目障りな人間達を暗殺した。

当時、幣原さんは、何の因果か、アダムス・ストークス症候群という難病に突如かかり、心臓の不整脈で意識を失い、家で寝ていて、外に出ることがなかった。

やがて血盟団のトップの井上日召という人間が自首し、団員達も次々と逮捕され、血盟団の一人一殺のリストがあきらかになったんだけど、そのリストには幣原さんの名前もあつたんじゃ。

幣原さんの命を狙っていた血盟団員は元東京帝国大学生の西木田祐弘という男だ

った。

彼は幣原さんが毎朝散歩にでかけるといふ話を聞きつけ、毎朝早くから幣原の家の玄関の前の植え込みの陰に潜んで、幣原さんを待ち構えていた。

でも、幣原さんは全く姿を現さず、そうこうしているうちに西木田は逮捕されて、新聞に顔写真入りで載ってしまった。

幣原さんの家に入入りしていた庭師が新聞を見て幣原さんに言った。

『あつ、旦那、こんにゃろー、毎日来て門のところではしゃがんでいやがった。不思議な奴だと思ってたんですが、こん畜生、知ってたらあつしが成敗してやったのに』とかなんとか。

結果、幣原はアダムス・ストークス症候群によって命を救われた。一九三一年のできごとだった」

「スゴい話」ノリカはびっくりした。

「全く。」

アダムス・ストークス症候群はペースメーカーをつけないと意識の消える発作を予防できず、命が危ない。

幣原さんは、ペースメーカーもない時代だったにもかかわらず、七十八歳まで生き続けた。なんとという運の強さ」

「本当に」

「人生って本当には不思議じゃ。」

この時期に幣原さんは命を奪われかねない病気のおかげで、テロリストに命を奪われずに済み、戦後まで生き延びた。

彼には果たすべき大きな役割があり、そのために運命によって生かされたんじゃないか？

わしはそう思っちゃる（＝思っている）。

一九三一年九月に満州事変という日本と中国の戦争がはじまった時、幣原は中国公使の蔣作賓しょうさくひんと会見してこう言った。

『直接利害関係の両国の代表者が、互いに顔と顔をつきあわせて、心と心で交渉するならば話の纏まらぬことはないんじゃないですか』

この時は『心と心の交渉』は実現せず、

幣原さんは政治の表舞台から去り、

戦火は日中戦争、第二次世界大戦へと拡大し、

敗戦を迎えた。

そして『心と心の交渉』が一九四六年一月二十四日の幣原さんとマッカーサー元帥の極秘の会談で実現する……。

人生って本当に不思議じゃ」

#4-5 平野三郎さんが記録した、幣原さんの言葉

「それはあたしも感じます。で、一九四六年一月二十四日に幣原さんはマッカーサー元帥に『日本は軍隊も兵器も持たない』というルールと『象徴天皇制』のルールをセツトで入れることを提案したんですよね？」とノリカ。

「うん。そして、幣原さんは自分がそういうことをほとんど誰にも言わないまま亡くなった」

「でも、ほとんど話さなかったということは、何人かの人には話したということですよ？」

「そういうこと。幣原さんが必要十分に詳しく話した相手は、ただ一人、平野三郎という人じゃった」

「へえ。平野三郎さんってどんな人だったんですか？」

「『水のまち』とも言われている岐阜県の郡上八幡の生まれで、戦前は憲兵に捕まっ
てひどい拷問を受けたこともあって、兵隊になって中国に行っている間に戦争が終わ
った。」

戦後、郡上八幡の町長をしたあと、衆議院議員になった。その時、尊敬していた幣
原さんに会いに行つて、秘書役となった。

そして、幣原さんが亡くなる十日ほど前に、幣原さんから一九四六年一月二十四日
の極秘会談の話を詳しく聞いたんじゃ」

「そうだったんだ」

「その極秘会談の話を詳しく聞いたのは平野三郎さんだけじゃった。平野さんは『幣
原先生から聴取した戦争放棄条項等の生まれた事情について』という文書を書き、そ
れは昭和三十年代の憲法調査会の公式の資料になった。それは『平野文書』とも呼ば
れちゅう（＝呼ばれている）」

「平野文書？」

「そう。正式の名前は長くて覚えにくいから、『平野文書』って・・・」

「平野文書にはどんなことが書いてあるの？」

ケンタは質問した。

「ネットで、『幣原 平野』でググればこの文書は出てくる。話し言葉で書かれちゅ
うし、そんなに長くはない文章で、読みやすいと思うから、興味があつたら読んでみ
て。」

それはともかく、とりあえず、どんなことが書いてるか、幣原さんがなんとやって
いるか、かいつまんで話してみようか。聞きたいかの？」

ケンタもノリカも頷いた。

龍馬は一枚の古い新聞のコピーを取りだした。



「これは一九六四年一月二十三日の熊本日日新聞のコピーじゃ。」

平野文書が憲法調査会の委員たちに配られたのは同じ年の二月七日。

この記事はその前に平野文書の内容などを書いた大スクープ記事で、北から南まで、全国津々浦々の新聞の第一面に大きく載ったぜよ」

「そのくらいのニュースバリューがあったっていうことね？」

「そう。この記事も、平野文書に記録された幣原さんの証言のポイントを書いちゃうけど、君たちにはわしの言葉で幣原さんの証言をまとめて話してみたいと思う。話していいかな？」

「聞きたい」

「OK。」

幣原さんは、ワシントン会議のスーパースターだったことからわかるように、『世界から戦争を無くすためにはどうしたらいいか』については、人生を賭けて、世界で一番深く考え、世界が認める実績ある人だった。

その幣原さんは、広島・長崎の原爆投下を知って、これはヤバい、このままでは人類は核兵器で滅んでしまう、もう人類は戦争をしてはいかん、と思った。

戦争をなくすためには、世界の国々が核兵器も含めた兵器の全てにサヨナラするしかない。(ただし、警察は武器を持っていてもいい。)

でも、世界の国々が1、2、3で一斉に武器を捨てるなんてことはありえない。『俺以外の全員が先に兵器を捨てたら俺も捨てる』そんな風に考えるのがいいところ。でも、そんなことまずありえない。

まずありえないとしても、全くありえないわけではない。ただ一つ、死中に活というか、全ての国が兵器を捨てるための第一歩があるとしたら、それは、誰かがまず自分から率先して兵器を捨てて、ほかの全ての国に対して『みんなも兵器を捨てよう。人類が滅びないように』と呼び掛けることだ。それを日本がやるのだ。戦争も核もない世界への扉を開くために。

よし、憲法に『日本は兵器を持たない』というルールを入れるよう、マッカーサーに提案しよう。占領軍の最高司令官であるマッカーサーのOKなしには、それは実現できないのだから。

日本の現状からして、自分から公にそのことを提案することはできないから、秘密に会って提案し、表向きは彼のリーダーシップでそれを実現してもらおう。

当時七十三歳になっていた幣原さんは、風邪で一時は今度こそもうダメかもしれないと思っただけで寝ている間にそう決心した。

そして、一九四六年一月二十四日にマッカーサーに会って、二人だけで話し合い、それを提案して説得し、マッカーサーのリーダーシップでそれを実現してもらった。

勿論、兵器を持たないということは軍隊を持たないということでもあった。

幣原さんには、天皇を守りたいと思う気持ちもあった。

天皇は元来戦争したくはなかった。戦争がはじまってからは立場上もあって戦争に関与したかもしれないが、元来はそうだった。しかし、天皇は軍隊の最高司令官だったし、政治のトップでもあったから、天皇を責任者として裁けとか死刑にしるとか、天皇制は廃止しろとかいう声は戦後の世界に強くあった。

だが、天皇が裁かれ、死刑になったりしたら日本は大混乱するだろう。そうなったら、ソ連が出て来て北海道を占領したりして、日本は朝鮮のように北と南に分断されてしまうかもしれないし、また、日本全体で共産革命が起こって、その結果、日本が共産主義の国になってしまうかもしれない。そういう事態は避けなければならない。そのためにも天皇を守らなければならない。

そういったことを幣原さんは考えた。

そして幣原さんは、天皇を守ることができるとしたら、どういふ提案をマッカーサーにして、どのように説得すべきか、現実的に考えた。

幣原さんは次のように全体の状況を分析した。

アメリカ政府やマッカーサーは天皇を生かして、日本の占領をうまく行かせるために、ソ連に対抗するために、利用したいと考えている。

しかし、イギリス軍として日本と戦ったオーストラリアやニュージーランドは、特攻攻撃もやってしまうような日本の軍隊を恐れ、もう二度とあの恐るべき日本の軍隊が復活しないように、その頭である天皇を処刑したがっている。

それらの国や、やはり天皇を処刑したがっているソ連などが大きな発言権を持つ対日理事会なる組織が二月二十六日に発足したら、その意見をマッカーサーも簡単に無視することはできなくなる。

そう考えた時、幣原さんは次のように分析した。

オーストラリアやニュージーランドが恐れているのは天皇そのものではなく、天皇をトップとする天皇の軍隊だ。

だから『天皇は政治や軍事から完全に手を引きます。手を引きますから、権力者たちから利用されることもなくなり、手は引きますから、権力者たちも兵器をもちません（戦力不保持を中心とする戦争放棄）』というルールと、『日本は軍隊も兵器をもちません（戦力不保持を中心とする戦争放棄）』というルールをセットで憲法に入れてしまえば、

二度と、オーストラリアやニュージーランドが恐れる天皇の軍隊は復活できない。

そうなればそれらの国も安心してソ連から離れ、アメリカのいうことを聞いて、天皇を残すことに反対しなくなり、天皇を守ることができるようだろう。

そう考えた幣原さんは一九四六年一月二十四日にマッカーサーにあつて二つのルール、『象徴天皇制』と『戦力不保持を中心とする戦争放棄』を憲法に入れるという提案をしてマッカーサーを説得し、マッカーサーも二つのルールを日本の新しい憲法に入れることに同意した。

こういったことを幣原さんは、死の十日ほど前に、平野三郎さんに証言しているんだよね」

「なるほど」ケンタは頷いた。

黙って聞いていたQが目を輝かせながら言った。

「幣原さんのおかげで、日本はこの七十年間戦争に巻き込まれることなく平和な国として経済や文化を発達させることができたんだよね。戦力不保持（＝兵器も軍隊も持たない）を中心とする戦争放棄のルールは日本国憲法の九条に書かれているんだけど、この九条は、戦争も核もない平和な世界への扉として、そういう世界をめざす人達にとってのバイブルとして、世界の多くの人達に大事に思われているんだよね。」

幣原さんは結論としてこうも言っている。

『いずれにせよ、ほんとうの敵はソ連でも共産主義でもない。敵は戦争それ自体である』

とね」

「わかる・・・」

「で、特に、『戦力不保持』を書いた憲法は世界で初めて、世界でただ一つ、日本国憲法だけなんだ」

「世界で一つだけの花ってことね」

ノリカはQに言った。

「そう。そして世界の花。闇に咲いた光の花。そういう憲法のルールを持っている日本は素晴らしい国なんだよね」

Qは誇らしげに答えた。

「それを作った幣原さんは人類の歴史にきちんと書くべき重要な人、学校の教科書でもしっかり取り上げるべき人だとわしは思っちゅうぜよ」

と龍馬は言った。

#4-6 なぜ幣原さんは？

「幣原さんはなぜそういったことについてほとんど語らないまま亡くなっちゃったの？」

ノリカは尋ねた。

「その答えについても、幣原さんは平野文書の中で言い遺しているんじゃないよ」

「どんな風に？」

「平野文書で、幣原さんはこう言っちゅう。」

『日の丸は日本の象徴であるが、天皇は日の丸の旗を護持する神主のようなものであって、むしろそれが天皇本来の昔に還ったものであり、その方が天皇のためにも日本のためにもよいと僕は思う。』

この考えは僕だけではなかったが、国体に触れることだから、仮にも日本側からこんなことを口にするには出来なかった。憲法は押しつけられたという形をとった訳であるが、当時の実情としてそういう形でなかったら実際に出来ることではなかった。

そこで僕はマッカーサーに進言し、命令として出して貰うように決心したのだが、これは実に重大なことであって、一歩誤れば首相自らが国体と祖国の命運を売り渡す国賊行為の汚名を覚悟しなければならぬ。松本君にさえも打明けることの出来ないことである。したがって誰にも気づかれないようにマッカーサーに会わねばならぬ。幸い僕の風邪は肺炎ということで元帥からペニシリンというアメリカの新薬を貰いそれによって全快した。そのお礼ということで僕が元帥を訪問したのである。それは昭和二十一年の一月二十四日である。その日、僕は元帥と二人切りで長い時間話し込んだ。すべてはそこで決まった訳だ』

「って」

「へえ。で、国体って？」

「国の根本方針、と言いかえたらええんじゃないかのー」

「なるほど」

「そして、『戦力不保持を中心とする戦争放棄』もまた国体に触れることだったから・・・」

「言えないよね、そう簡単には」

「自分の命の危険もあったかもしれないし。」

二つのルールをセットで入れた憲法の大本の案は、極東委員会のスタートする二月二十六日より前に閣議、つまり内閣の大臣たちの会議を通す必要があった。でもその閣議で幣原さんが『象徴天皇も戦力不保持も自分がマッカーサーに提案したものだ』とか言ったら、大臣たちは認めず、みんなで大臣をやめ、内閣は空中分解し、そうこうしているうちに二月二十六日が来て極東委員会がスタートし、天皇が裁かれる危険があった。

だから、言わなかった。

幣原さんは『平野文書』の中で、『松本君にさえも打明けることの出来ないことで

ある』と言っているんじゃないけど、

松本君というのは当時の幣原さんの内閣の憲法改正担当大臣だった人のことなんじゃ。

幣原さんは平野さんにはこう言っちゃおう。

『そのことは此処だけの話にして置いて貰わねばならないが』

『このいきさつは僕の胸の中だけに留めておかねばならないことだから、その積りでいてくれ給え』

平野三郎さんも、『平野文書』の最初の方でこう書いちゃう。

『なお、当日の幣原先生のお話の内容については、このメモにもあるように、幣原先生から口外しないようにいわれたのであるが、昨今の憲法制定の経緯に関する論議の状況にかんがみてあえて公にすることにしたのである』

と」

ケンタがずっととひっかかっていた疑問を口にした。

「さっきも言ったけど、『軍隊を持たなくて大丈夫なの?』という質問の答えを幣原さんは言っているの?」

「その質問は平野三郎さんもしっていて、それに対して幣原さんはこう答えちゃう。

『勿論軍隊を持たないと言っても警察は別である。警察のない社会は考えられない。殊に世界の一員として将来世界警察への分担負担は当然負わなければならない。』

しかし強大な武力と対抗する陸海空軍というものは有害無益だ。

僕は我国の自衛は徹頭徹尾正義の力でなければならぬと思う。その正義とは日本だけの主観的な独断ではなく、世界の公平な与論に依って裏付けされたものでなければならぬ。

そうした与論が国際的に形成されるように必ずなるだろう。何故なら世界の秩序を維持する必要があるからである。

若し或る国が日本を侵略しようとする。そのことが世界の秩序を破壊する恐れがあ

るとすれば、それに依て脅威を受ける第三国は黙ってはいない。

その第三国との特定の保護条約の有無にかかわらず、その第三国は当然日本の安全のために必要な努力をするだろう。

要するにこれからは世界的視野に立った外交の力に依て我国の安全を護るべきで、だからこそ死中に活があるという訳だ』

とな

「へえ。幣原さんって世界で最初の『武器を減らそう』国際会議のスーパースターだったんだよね？」

「そう。日本に幣原ありって世界に信賴されていた。

幣原さんは平野三郎さんを通じて、こういう言葉を残しちゅう。

『あれ（『兵器を持たない』という憲法のルール）は一時的なものではなく、長い間僕が考えた末の最終的な結論というようなものだ』

『戦争をやめるには武器を持たないことが一番の保証になる』

そして、『僕は我国の自衛は徹頭徹尾正義の力でなければならないと思う』とも、今引用した言葉の中で言っている。

素人が同じことを言っても『何、非現実的なことを言ってるんだ』とか『狂ったんじゃないの？』とか言われるじゃろう。

しかし、命と一生を賭けて平和を守ろうとしてきた幣原さん、『兵器をへらそう』国際会議のスーパースターとして世界に評価されてきた幣原さん、そういう『平和の名人』がそういったことを言ったのは、『兵器をもたないこと』が一番現実的な防衛だという結論に至ったからなんじゃ。

幣原さんは平野さんにこうも言っている。

『非武装宣言ということは、従来の観念からすれば全く狂気の沙汰である。だが今では正気の沙汰とは何かということである。武装宣言が正気の沙汰か。それこそ狂気の沙汰だという結論は、考えに考え抜いた結果もう出ている』

とな」

「そうか・・・」

ケンタは考え込んだ。

「ねえ、ケンタ君」

「はい」

「君は拳法には自信があったな？」

「まあ、多少は。でも最初のシミュレーションで独裁者の護衛に立ち向かったけどかなわなかったんだよね」

「勝つためには相手よりも強くならなければならん」

「そう」

「国と国の場合もその点では同じじゃ。お互いに相手より強くならなければと競争し合ったら、その競争はいつになったら終わるのかな？」

「うーん。終わりはないかも。いや、お互いが核兵器を使って滅ぼし合ってやっと終わるのかも。そうか、だから幣原さんは広島や長崎の原爆投下を知って・・・」

ケンタはまたもや考え込んだ。

「ところで、幣原さんが提案しマッカーサー元帥がOKしたあと、マッカーサー元帥はマッカーサーノートというものを書き、それから日本国憲法が生まれた」と龍馬。

「マッカーサーノートにはどんなことが書いてあるの？」とノリカ。

「それには、象徴天皇制も、『兵器をもたないルール』戦力不保持も『戦争はしませんルール』戦争放棄も書かれてちゅう。平野文書を読めばわかると思うけど、戦争放棄も戦力不保持と一緒に幣原さんが提案したものなんじゃ」

「ふむふむ」

「それで、マッカーサーノートには、戦力不保持・戦争放棄と一緒に『日本の軍隊には**交戦権**が与えられることもない』というルールも書かれていちゅう。このルールについては平野文書には明確には書かれてはいないけれど、戦力を持たない＝軍隊を持たないんだから、当然そうなる」

「どういうこと？」

「交戦権が与えられないということはこのー、

もしも日本が九条を無視して軍隊を作ったとしてもそれは国際的には軍隊ではなく、単なる武装集団にすぎない。

なので、もしもそれが人を殺したり傷つけたりものを破壊した場合には単なる犯罪者として、刑法の殺人罪、障害罪、器物損壊罪などで罰せられる。

ということなんじゃ。

交戦権のある軍隊に属する兵隊の場合はそういうことをしても、刑法上の犯罪人にはならない。捕まっても捕虜として扱われるから」

「そういうことなんだ？」

「九条には戦力不保持、交戦力の否認、戦争放棄の三つのルールが三点セットで書かれている。そこまで徹底した平和のルールが書かれている憲法は、今でも世界に日本国憲法以外にないんじゃないよ」

「おー」

「そして、幣原さんは当時の全世界の人達の願いを代表して口にする形で、九条に書かれることになる徹底した平和のルールを提案したんじゃないと思う」

「どういうこと？」

「日本で三百万人、アジアで二―三千万人、世界で五―八千万人と言われる多大な犠牲者を出した第二次大戦の結果、戦後、日本を含む世界中の人々は心から戦争のない世界を求めたんじゃないよ。」

また、核時代のはじまりとしての広島・長崎の原爆投下によるとんでもなく悲惨な被害を目の当たりにした日本を含む世界中の人々は、戦後、『核を廃絶しなければ遅かれ早かれ人類全体が滅びかねない』と考え、核の廃絶を心から願ったんじゃないよ。

そういう世界中の人達の全人類的な切望を象徴・代表する形で、幣原さんはああいう提案をしてマッカーサー元帥を説得したんじゃない」

「なるほど。戦争の恐ろしさとか残酷さとか悲しみとか痛みとかをみんなが身に感じて感じていた中で、そういう提案をしたのね」

「そう思うぜよ。」

これはわしが直接平野三郎さんのお嬢さんさんから聞いたことなんだけど、彼女はこう言っちゃったよ。

『父がはっきり言っていました。私にもうしつこく。【それはも、大変な、人類始まって以来の、もう、すごい解釈であり、決断であり、提案であったっていう・・・。わかりますか】みたいな感じで』

『あと父が言うには、【なぜこれが、こんな大事なことが公になってないかというと、

それは幣原先生とマッカーサーと二人で話したからだ、と。で、なぜそれが可能だったのか、あなたわかりますか？【みたいないことを言うわけですよ。わかるわけないから言つてと言つと、【幣原先生はもう英語がペラペラだったんです、全然通訳なんか必要なくマッカーサーとしゃべることができた、だから、こういうことが現実に起きたんだ、そして誰も、通訳もなにもいないから、それが二人の間だけのことで公になつてないんだ】ということと言っていました。】

『父は毎晩しゃべつてたんですけれど、最後の方はもう必ず泣きながら、感極まつて泣きながらも毎度のことです。平和というものを、どういう風にとらえているかって（父があたしに）聞いて、幣原先生がこのぐらい先を見通して、全人類のことを考えて、つていうところで号泣して……。あたしはもうあきれて見てるつて感じでした』

つて」

「へえ。お嬢さんの証言つて、やっぱりなんかとつてもリアル」とノリカは言い、ケンタも「ほんとだ」と頷いた。

「あの時代は、いくら総理大臣でも天皇さんのOKなしにああいうことを決めることはできなかったはずなんじゃ。幣原さんは天皇さんのOKをもらつてから、あの日、一九四六年一月二十四日、マッカーサー元帥に会いに行つて九条と一条をセットで提案したに違いないとわしは思つちゅう」

龍馬はそう付け加えた。

#4-7 マッカーサー元帥の手紙・自叙伝。羽室メモ

「ところで、マッカーサー元帥の方も、手紙やアメリカ議会の証言や手紙で、一九四六年一月二十四日に幣原さんと話したことについて書いているんじゃない」

「そうなんだ？」とケンタ。

「うん。まず、マッカーサー元帥は、彼が書いた『マッカーサー回顧録』という本の中で、その日のことについて、次のように書きちゅう。この本の中では『幣原男爵』も『首相』も幣原さんのことなんだじゃ。ということ、読んでみるぜよ。」

幣原男爵は一月二十四日（昭和二十一年）私の事務所を訪れ、私にペニシリンの礼を述べたが、そのあと私は、男爵がなんとなく当惑顔で、何かをためらっているらしいのに気がついた。私は男爵に何を気にしているのか、とたずね、それが苦情であれ、何かの提議であれ、首相として自分の意見を述べるのに少しも遠慮する必要はないと

いってやった。

首相は、私の軍人という職業のためにどうもそうしにくいと答えたが、私は軍人だって時折りいわれるほど勘がぶくて頑固なのではなく、たいていは心底はやはり人間なのだと述べた。

首相はそこで、新憲法を書上げる際にいわゆる『戦争放棄』条項を含め、その条項では同時に日本は軍事機構は一切もたないことをきめたい、と提案した。そうすれば、旧軍部がいつの日かふたたび権力をにぎるような手段を未然に打消すことになり、また日本にはふたたび戦争を起す意志は絶対でないことを世界に納得させるという、二重の目的が達せられる、というのが幣原氏の説明だった。

首相はさらに、日本は貧しい国で軍備に金を注ぎ込むような余裕はもともたないのだから、日本に残されている資源は何によらずあげて経済再建に当てるべきだ、とつけ加えた。

私は腰が抜けるほどおどろいた。長い年月の経験で、私は人を驚かせたり、異常に興奮させたりする事柄にはほとんど不感症になっていたが、この時ばかりは息もとまらんばかりだった。戦争を国際間の紛争解決には時代遅れの手段として廃止することは、私が長年情熱を傾けてきた夢だった。

現在生きている人で、私ほど戦争と、それがひき起す破壊を経験した者はおそらく他にあるまい。二十の局地戦、六つの大規模な戦争に加わり、何百という戦場で生残った老兵として、私は世界中のほとんどあらゆる国の兵士と、時にはいっしょに、時には向い合って戦った経験を持ち、原子爆弾の完成で私の戦争を嫌悪する気持ちは当然のことながら最高度に高まっていた。

私がそういった趣旨のことを語ると、こんどは幣原氏がびっくりした。氏はよほどおどろいたらしく、私の事務所を出るときには感きわまるといった風情で、顔を涙でくしゃくしゃにしながら、私の方を向いて『世界は私たちを非現実的な夢想家と笑いあざけるかもしれない。しかし、百年後には私たちは予言者と呼ばれますよ』と言った。

って」

「なんか、すごい！」

「じゃろ？ マッカーサー元帥が書いていることは、平野文書で幣原さんが言っていることと基本的に一致しているぜよ。それから、マッカーサー元帥は、一九五一年五月五日のアメリカ上院の軍事外交委員会で、次のように証言しちゅう。

日本の民衆は『核戦争が何を意味するか？』について世界のいかなる民衆よりもよく知っていました。彼らにとってそれは理論ではありませんでした。

彼らは原爆投下によって死んだ者の数を数え、それらの死んだ者たちを葬ったのです。

彼らは自分たちの意志で戦争を非合法化する規定を彼らの憲法に規定しました。

日本の首相幣原氏が私の所にやって来て、言ったのです。『私は長い間熟慮して、この問題の唯一の解決は、戦争をなくすことだという確信に至りました』と。彼は言いました。『私は非常にためらいながら、軍人であるあなたのもとにこの問題の相談にきました。なぜならあなたは私の提案を受け入れないだろうと思っっているからです。しかし、私は今起草している憲法の中に、そういう条項を入れる努力をしたいのです。』と。

それで私は思わず立ち上がり、この老人の両手を握って、それは取られ得る最高に建設的な考え方の一つだと思う、と言いました。世界があなたをあざ笑うことは十分にありうることです。ご存知のように、今は栄光をさげすむ時代、皮肉な時代なので、彼らはその考えを受け入れようとはしないでしよう。その考えはあざけりの的となることでしょう。その考えを押し通すにはたいへんな道徳的スタミナを要することでしょう。そして最終的には彼らは現状を守ることはできないでしょう。こうして私は彼を励まし、日本人はこの条項を憲法に書き入れたのです。そしてその憲法の中に何か一つでも日本の民衆の一般的な感情に訴える条項があったとすれば、それはこの条項でした。

って。

この議会証言で、マッカーサー元帥は『幣原さんが次のように言った』と証言しているわけじゃ。

『私は長い間熟慮して、この問題の唯一の解決は、戦争をなくすことだという確信に至りました』『私は今起草している憲法の中に、そういう条項を入れる努力をしたのです。』

って」

「ふーん」

「でね、マッカーサー回顧録』とは違って、この証言ではマッカーサー元帥は、幣原さんが『日本は軍事機構は一切もたないことをきめたい』と提案したと証言してはおりん。だから、

『幣原さんはその日マッカーサーに【戦争放棄】は提案したけど、【戦力不保持（＝軍事機構は一切持たない）は提案してはいないだろう』

って主張する人もおる。でも、その主張は間違いで、幣原さんが言った『私は今起草している憲法の中に、そういう条項を入れる努力をしたいのです。』の『そういう条項』は『軍事機構を持たないという条項』だと考えるのが正しい筋じゃと思う」「どうして正しい筋なの？」とノリカ。

「その理由はね、ちよつと長くなるけど、面倒じゃなかったら是非聞いてほしい。

戦前の一九二八年に不戦条約という国際条約ができて、それに日本も入った。入った時の外務大臣はほかならぬ幣原さんだったんじゃないけどね。

実はその不戦条約には『戦争放棄』も書かれちよつた。つまり、日本はその条約に入ったことによって世界に『戦争放棄』を約束した。にもかかわらず戦争をした。そのことは世界の国々は承知していた。もちろん、マッカーサー元帥も・・・。

だから、一九四六年一月二十四に幣原さんがマッカーサーに、単に『戦争放棄を憲法に入れたい』と提案しても、マッカーサー元帥が『思わず立ち上がり、この老人の両手を握って、それは取られ得る最高に建設的な考え方の一つだと思う、と言いました』なんてことはありえなかつたじゃろうね。その場合、マッカーサー元帥は多分次のように言ったじゃろう。

『幣原さん、不戦条約に入って戦争放棄を約束した日本が今度の戦争を起こしたことは世界中が知っています。だから憲法に戦争放棄を入れたって、世界は『不戦条約の時と同じように、遅かれ早かれ、日本は約束を破ってまた戦争するに違いない』と思うだけでしょう。勿論オーストラリアやニュージールランドなどもそう思うでしょうから、結局天皇を守ることはできず、その結果天皇が処刑されたり天皇制が廃止されたりしたら、ソ連に北海道を占領されたり、最悪、日本が共産主義国家になってしまう恐れがあります。なので、憲法に戦争放棄を入れることには、私は賛成できません』とかな。

そうでなく、幣原さんが憲法に『軍備を持たない』Ⅱ『軍隊を持たない』条項を憲法に入れたいと提案したからこそ、マッカーサー元帥は『腰がぬけるほどおどろき』『思わず立ち上がり、この老人の両手を握って、それは取られ得る最高に建設的な考え方の一つだと思う、と言いました』なんていうびっくり仰天の反応をしたんじゃないと思う」

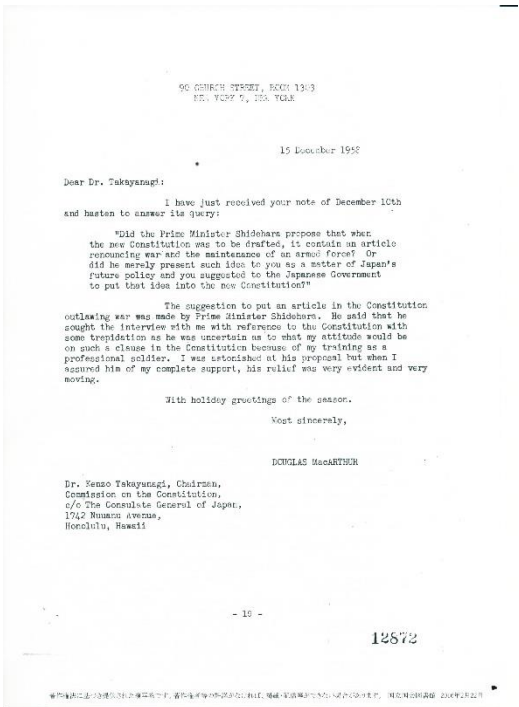
「その通りだと思うな」とケンタ。ノリカも頷いた。

「あと、マッカーサー元帥は一九五八年十二月十五日に、日本の憲法調査会の高柳賢三会長の『幣原首相は、新憲法起草の際に戦争と武力の保持を禁止する条文をいれる

ように提案しましたか?』という質問に対して、

戦争を禁止する条項を憲法に入れる提案は、幣原首相が行ったのです。

と答える手紙を送つちゆう（＝送っている）
「なるほど」



おわだいらこまつち

「それから、幣原さんが中学時代からの大の親友の大平駒槌さんという人に、このことについて話した内容を大平さんが娘さんの羽室ミチ子さんにメモさせた『羽室メモ』というのが残っていて、それにはこう書いてある。

つづいてあれこれ話を始め、かねて考えた世界中が戦力を持たないという理想論を始め、戦争を世界中がしなくなる様になるには戦争を放棄するという事以外にないと考えると話し出したところがマッカーサーは急にたちあがって両手で手を握り涙を目にいっばいためてその通りだと言いだしたので、幣原は一寸びくりしたという。しかしマッカーサーも長い間悲惨な戦争を見つづけているのだから身にしみて戦争はいやだと思っていたのだろう。

幣原は更に世界から信用をなくしてしまった日本にとって戦争をしないと云う様なことをハッキリと世界に声明する事、只それだけが敗戦国日本を信用してもらえない唯一の堂々と云えることではないだろうかと言うような事も話して大いに二人は共鳴してその日はわかれたそうさ。（中略）

そこで出来る限り早く幣原の理想である戦争放棄を世界に声明し日本国民はもう戦争をしないと云う決心を示して外国の信用を得、天皇をシンボルとする事を憲法に明記すれば列国もとやかく言わずに天皇制へふみ切れるだろうとマッカーサーは考えたらしい。

だからマッカーサーはかならずこれを入れた憲法の草案を早く作る様にと部下に命令したとその後、幣原に会った時、説明したのでこれ以外に天皇制をつづけてゆける方法はないのではないかと言う事に二人の意見が一致したのでこの草案を通す事に幣原も腹をきめたのだそうだ。

って。

幣原さんは大の親友だからこそ話したんじゃないと思う。話したのは一九四六年の四月上旬ごろっていうことじゃ。その内容は、平野文書やマッカーサー元帥の回顧録・議会証言・手紙の内容とも一致しちゅう」

「ふーん。親友に話した記録も残ってるんだね」とノリカ。

「そう。でも、平野文書やマッカーサーの回顧録や証言や手紙の内容を否定する人もいるんじゃないね」

「なんで？」

「憲法はマッカーサーの押しつけだから、変えるべきだって言ってる人達がいて、安倍晋三総理なんかも憲法を変える第一番目の理由としてそれを言っちゅうけど、そういう人たちにとっては、平野文書やマッカーサーの回顧録や証言や手紙はとんでもなく不都合じゃからのー。」

でも、特に平野文書で幣原さん本人が『戦力不保持・戦争放棄と象徴天皇制は自分がマッカーサー元帥に提案し、彼を説得して憲法に入れることをOKさせた』と詳しく書いちゅうのが決定的で、それを否定するためには、幣原さん、マッカーサー元帥、平野三郎さん、が三人ともみんな嘘をついていることを証明しなければならん。じゃが、それは不可能だし、事実として幣原さんもマッカーサー元帥も平野三郎さんもみんな本当のことを言っちゅうとわしは確信しているぜよ」

「さつき平野三郎さんのお嬢さんの話を聞いたよね？」とノリカ。

「ああ」

「平野さんがお嬢さんにまで嘘をつく意味は全くないと思うよ。だから、平野さんは嘘をついてはいないと思う」

「わしもそう思う。」

幣原さんは『外交五十年』という自叙伝を遺しちゅう。一九五一年に出版された本なんじゃよね。その年の三月十日に幣原さんは亡くなっちゅう。亡くなる前に、幣原さんがしゃべったことを読売新聞の記者が文字にして、新聞に載せ、本にしたものなんじゃ」

「遺作ってやつだね？」とケンタ。

「そういうことになるね。その本で、幣原さんはこう言っちゅう。」

私ははからずも内閣組織を命ぜられ、総理の座に就いた時、すぐ私の頭に浮かんだのは、あの電車の中の光景だった。これは何とかしてあの野に叫ぶ国民の意思を実現すべく努めなくちゃいかんと堅く決心したのであった。

それで憲法の中に、未来永こうそのような戦争をしないようにし、政治のやり方を変えるようにした。

つまり戦争を放棄し、軍備を全廃して、どこまでも民主主義に徹しなければならぬということ、他の人は知らないが、私だけに限る限り、前に述べた信念からであった。それは一種の魔力とでもいうか、見えざる力が私の頭を支配したのであった。

よくアメリカの人が日本へやって来て、こんどの新憲法というものは、日本人の意志に反して、総司令部の方から迫られたんじゃないやありませんかと聞かれるのだが、それは私の関する限りそうじゃない、決して誰からも強いられただけではないのである。

軍備に関しては、日本の立場からいえば、少しばかりの軍備を持つことはほとんど意味がないのである。将校の任に当ってみればいくらかでもその任務を効果的なものにしたと考えるのは、それは当然のことであろう。

外国と戦争をすれば必ず負けるに決まっているような劣弱な軍隊ならば、誰だって真面目に軍人となって身命を賭するようないかな気にはならない。それでだんだんと深入りして、立派な軍隊を拵えようとする。戦争の主な原因はそこにある。中途半端な、役にも立たない軍備を持つよりも、むしろ積極的に軍備を全廃し、戦争を放棄してしまふのが、一番確実な方法だと思うのである。

ってね。

ほいでの一、幣原さんはその本の『序』、つまり「はじめに」に『この本に書く史実は、私の記憶に存する限り、正確を期した積りである』って書きちゅう。その『序』の日付は三月二日、つまり亡くなる八日前で、平野三郎さんに『平野文書』に記録されていることを話してから二、三日後じゃった。この時期の幣原さんは死が近いことを悟っていたと思う。そういう幣原さんには嘘を遣す動機は全くなかったと思う。

ところで、幣原さんは平野さんに、

『そのことは此処だけの話にして置いて貰わねばならないが』

『このいきさつは僕の胸の中だけに留めておかねばならないことだから、その積りでいてくれ給え』

って言った。でも、だとしたらなんで、平野さんに話したのか？ 本当に秘密を保

ちたいんだったら、そもそも話すはずはなかったんじゃないかのー？

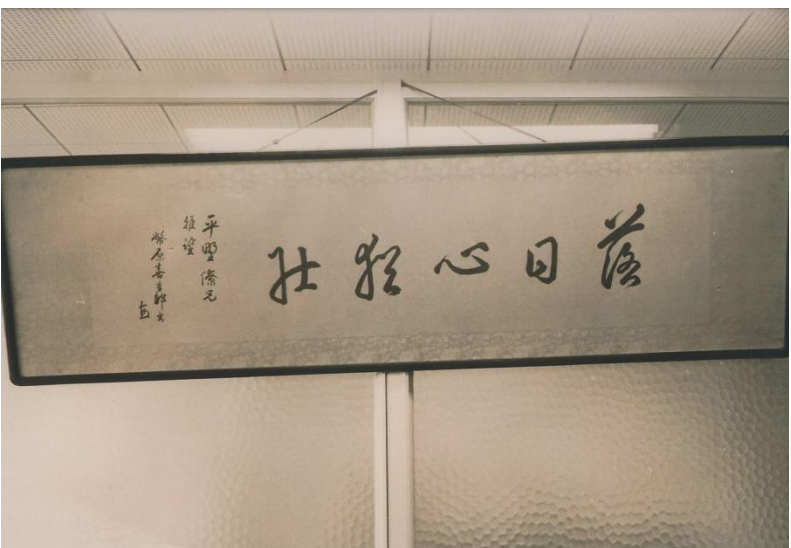
いつか時が来たら、あるいは本当に必要な時には、平野さんに公表してもらいたくて話したんじゃないやろうってわしは思っちゃう。その言葉の外の幣原さんの意志は平野さんにも伝わったはずで、じゃからこそ、平野さんは、昭和三十年代に憲法九条はマッカーサー元帥の押しつけだから変えようという大きな議論が沸き起こった時、

『あれはマッカーサー元帥の押しつけではなかった』

『象徴天皇制とセットで戦力不保持・戦争放棄を生み出したのは幣原さんだった』

という事実を世に知らせる必要があると判断して、それで一九六四年二月に『平野文書』を憲法調査会資料として公表したんじゃないかと思う。平野文書を不都合に思った人たち、つまり憲法九条はマッカーサー元帥の押しつけだから変えるべきだと主張していた人たちの中には、平野さんはウソをついているとかイチャモンつけた人もいるけど、平野さんが幣原さんから聞いた事実を平野文書に書いたことに間違いはないと思うし、『平野三郎さんは平野文書で嘘を書いている』って言ってる人達の根拠は全部反論して覆くつがえすことができるぜよ。幣原さんやマッカーサー元帥が嘘をついているという人達の根拠もまた全部そうできるしな。

たとえば、この写真には、幣原さんが自分で『落日心猶壮』って書いて平野三郎さんに贈った書が写っちゃう。見ればわかるけど、幣原さんが書いて署名して平野さんに贈ったものじゃ。これが平野さんの家の奥座敷にかかっていたことを平野冴子さんは覚えちゃう。幣原さんが平野さんと親しくしていた事実が、この書からはつきりわかるんじゃないよ」



#4-8 ほかのおとうさんたちも日本人だった

「日本国憲法のほかの部分はこういう風にして生まれたの？」
ノリカは質問した。

「戦争が終わったのは一九四五年の八月十五日で、

同じ年の十二月二十六日に、憲法学者の鈴木安蔵という人のリーダーシップのもとに、彼も含めた人たちが作った『憲法研究会』の『憲法草案要綱』が発表された。それが日本国憲法のベースとして取り入れられちゅう。

更に『憲法草案要綱』は明治時代の植木枝盛という人の作った憲法案を参考に作られた。

ずっと埋もれていた植木枝盛の憲法案を戦前に再発見したのが鈴木安蔵だったんじゃない」

「そうだったんだ」

「ああ。日本国憲法は明治以来の日本人の民主主義の流れの中で生まれたんじゃないよ。もっとさかのぼったら、

日本国憲法第九条の、

『戦争をしないで世界の人たちと仲良くしようね、』
という考えは、

六〇四年に聖徳太子が作ったと言われる一七条憲法の『和をもつて尊しとなし』というやつとも通じていると考えることもできるぜよ」

『和をもつて尊しとなし』って時空を超えた日本人の心かも。憲法第九条もそういう日本人的な心の花なのかも」とQ。

「そうじゃな。」

あと、病院でのシミュレーションにでてきた、保険で病院にかかれる権利というのがあったじゃろ？」

「ええ」

「あの権利は、社会権という人権の一部なんだ」

「社会権？」とケンタ。

「そう。国民に社会権があるから、政府は国民の健康や福祉や生存のために税金を使ったりサービスを提供しなければならん。」

その社会権は、日本国憲法の第二十五条に書かれているけど、それを憲法に入れるように提案したのは森戸辰男という人じゃったんだ」

#4-9 歴史の流れの中で

「聖徳太子とか植木枝盛とか鈴木安蔵とかいう人の名前が出て来たけど、日本国憲法は日本の歴史の流れの中で出てきたって考えていいの？」

と質問したのはケンタだった。

「もちろんじゃ。そして、それは日本だけでなく、世界の歴史の流れの中で出てきたんじゃ。各国の憲法は歴史の流れの中でお互いに影響し合いながら発達してきたということじゃね」

「憲法のない時代もあったということだね？」。

「そう。憲法のない時代には、王様とか皇帝とかが独裁しちよった。」

と言っても、自分を支える少数の貴族とかの意見も採り入れながらそうしちよった。そうでないと支持を失って引きずりおろされたりしちゃうからな。

でも、貴族とかはやはり王様とかが好き勝手に独裁できないようにするールを作ること望んで、そういうったルールを王様とかに吞ませた。それが憲法のはじまりだと

言われちゅうぜよ。

そういう憲法のことの起こりとして、一二〇六年に東洋でジンギスカン法典というものが生まれ、一二一五年に西洋でマグナカルタというものが生まれ、

それが発達して、一般国民の人権を保障し、権力者に人権を侵害させないような憲法になっていったんじゃ。

今、これ以上詳しくは言わんけど」

そういう龍馬にノリカは質問した。

「話を聞くうちに、もつといういろいろ知りたいなと思えて来たよ。でも、そんな風に思ったのは生まれて初めてだと思った。

あたしも含めてこの国ではほとんどの人が、幣原さんも含めて憲法のことをほとんど知らないんじゃないかと思うんだけど、

なんでそうなのかな？

すごく大事なことなのに・・・」

「それは学校とかメディアとかがちゃんとそういうことを伝えてこなかったからじゃと思う」

「なんで、伝えてこなかったのかな？」

「権力の中に、伝えたくない人たちがいて、彼らが大きな力を持ってきたからだと思っぜよ。」

とにかく、国民が主役の今の日本の平和憲法は日本人が生み出したものだったんじや。発案者が日本人だっただけでなく、当時の国会でも熱く議論された結果できたのがそれだったという点でも日本人が作ったものじゃった。

そういう国民が主役の平和憲法Ⅱ見えない守護神憲法を、毒入りクツキーを混ぜた4つのクツキーによって殺して、権力者いや独裁者が主役の黒魔術の杖憲法に変えてしまおうというのが安倍総理たちの考えなんじゃ。

このことを一人でも多くの人たちに伝えて、今の国民が主役の平和憲法Ⅱ見えない守護神憲法が殺されることを是非防いでほしいぜよ」

と龍馬は言った。